

むすんで ひらいて

第37号

発行日
平成29年3月

発行：福井市地区社協連絡協議会
〒910-0019 福井市春山2丁目7-15 (社会福祉法人 福井市社会福祉協議会内)
TEL 0776-26-1853 FAX 0776-26-9109



会長報告 中央が松成会長

計画の詳細は
市社協ホームページをご覧ください
<http://www.fukuic-shakyo.jp/>

第3次福井市地域福祉活動計画が平成29年3月に策定されました。地区社協からは、連絡協議会の松成会長のほか、3名の地区社協関係者がメンバーとして検討を重ね、策定に關わりました。

誰もが安心して暮らせる福祉のまちづくりを目指し、平成29年度から33年度までの住民主体の行動計画として、20の取り組みを進める内容になっています。

ここでは、20の取り組みのうちのひとつ、「福祉委員活動調査と見守り活動の充実」を取り上げます。

新しい地域福祉活動の計画がスタートします

第3次 福井市地域福祉活動計画

これからの 福祉委員

福祉委員はなにを目指すのか？

計画策定にあたり、懇談会やパブリックコメントに市民の皆さまからご意見が寄せられました。

民生委員と福祉委員が連携して十分に見守り活動を行えていない。

福祉委員活動を円滑に進めるために、環境を以下のように改善してほしい。

- 後継者等人材発掘が容易になること。
- 地域の福祉委員による諸活動が、福祉行政の一つとして地域住民に認知されるようになること。
- 見守りなどの活動について、世話好き人間が行っているだけだという誤解を世間から受けることがなくなること。



力を合わせて地域福祉で
安心して暮らせるまちづくり



取り組み 福祉委員活動調査と見守り活動の充実

福祉委員に見守りの有無、対象、頻度などの調査を行い、見守り活動をより充実させるために活動の改善方法等を地区社協と共に考え、福祉委員活動の強化に取り組んでいきます。

現状と課題

平成28年10月現在1,627名の福祉委員がいますが、見守り活動の実態は、委員により違いや差が生じており、意識啓発も含めて活動を支えていく必要があります。

5年後の目標

福祉委員活動の充実により、人と人とのつながりが強まり、災害時にも適切な支援体制が取れるようにします。

次頁では計画に先立って実施された福祉委員見守り活動アンケートの結果を取り上げます。

福祉委員の声届けます

福井市社協では、平成28年10月に全福祉委員を対象に「福祉委員見守り活動アンケート」を実施し、1,627名中1,094名の方にご回答いただきました。その中で次のような声がありました。

町内の人に依頼されてもただ福祉委員になったからといって急に見守りは難しい気がする

プライベートなことに踏み込むのは抵抗がある何回も訪ねたら嫌な顔をされた

働いているから訪問はできないけど通りすがりに様子を見ています

ごみ出しの時に声かけしている

行事を通して少しずつ活動できたらいいな

「いつもありがとね」と言われると嬉しい地域の人が声をかけてくれるようになりうれしい

福祉委員の存在が薄い

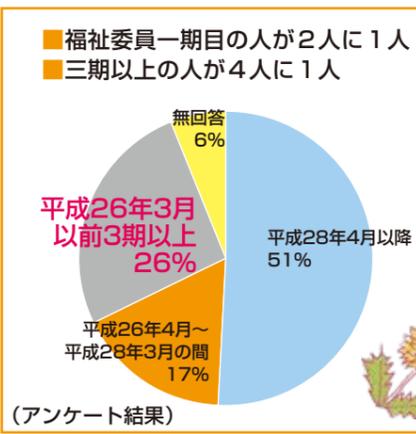
何もしないまま2年が終わりそう

自治会長は福祉委員活動をきちんと把握しているのか

民生委員との連携を考えたい

福祉委員になって何期目が

福祉委員を3期以上、つまり6年以上活動を続けている方が実に4分の1もいることが分かりました。「見守り活動を通じて、一人で抱え込まなくていいんだと感じるようになった。これからも続けたい」。活動の継続を希望する声です。



見守り活動の実践事例を学びたい

「活動をどのように行うのか、誰に連絡して聞けばいいのか悩む」、「マニュアル通りいかない場合どうすればいいか知りたい」。見守り活動へのサポートを希望する声です。永きにわたり、福祉委員を務められた坂井敏子さんからお話を聞きました。

坂井 敏子さん (円山地区)



活動開始から14年、福祉委員として市社協で活動されています。

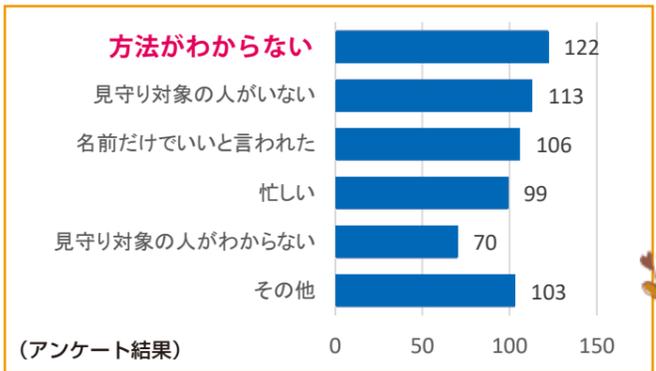
Q すぐに活動を開始できましたが

A 最初は、自治会型デイホームのお手伝いから始まり、お茶を出す時に高齢者の方に話かけたりしました。また、私の地区では、福祉委員が高齢者宅に小学4年生の活動報告新聞を持って行くことがあり、その際に「お元気ですか」と声をかけるようにしました。こうした活動がよいきっかけになり、最初は一言だったのが、回数を重ねるうちに会話も増えてきました。

Q 困った時は誰に相談しますか

A 訪問するといつも顔を覗かせてくれる方が、その日は返事もなく、玄関の奥から大きな音が聞こえました。何かあったかと思い、民生委員さんに連絡し、向かいの家にも聞きに行きました。結局、その方は救急車で運ばれ大事に至りませんでした。

見守り活動を行っていない理由



見守り活動を行っていない理由で一番多いのは、方法がわからない

「お宅を訪問する」、「出会った時に挨拶や日常会話をする」、「自治会型デイホームや配食時に話をする」など、方法はたくさんあります。しかし、地域のつながりや関心が薄くなっていく今、「見守りのやり方や声かけの仕方が分からない」という声。実際にどうすればいいのかが分からない、これが本音のようです。

見守り活動への取り組み

最初の一步を踏み出すことが難しい。これに対する地区社協連絡協議会(①)や地区社協(②③④)での取り組みを紹介します。

- 見守り活動に関する研修会**
市内の地区社協の役員や事務局が一堂に集まり研修をしています。平成28年度のテーマは「福祉委員活動を推進していくために」。福祉委員さんが活動しやすい環境を目指して、議論が交わされました。
- 福祉委員・民生委員合同研修会**
各地区の福祉委員と民生委員が集まり、福祉委員ハンドブックの活用や高齢者の方に話しかける模擬練習など、多様な研修をしています。
- 地域支え合いマップ作り**
各地区の福祉委員、民生委員、保健衛生推進員、自治会長などが集まり、見守り対象者の方の住まいを印した地図を作っています。地図をもとに誰が、いつ、どこを、どうやって見守っていくかを話し合います。
- 認知症高齢者ひとり歩き見守り活動**
実際に街に出て、ひとり歩きをしている認知症役の人に声をかけを体験する活動です。参加者からは「経験を積むことが必要」との感想がありました。

児童やひとり親家庭も見守り活動の対象

Q 辛かったこと、嬉しかったことは

A 小学4年生の活動報告新聞を高齢者の方に届ける時に拒否される方もいます。そんな時は辛いなと思わなくもないですが、無理強いはしません。訪問することにこだわらず、畑に出ているなど外から様子を確認するようにしています。逆に、訪問して「入って、入って」と待っていてくれると嬉しく思います。

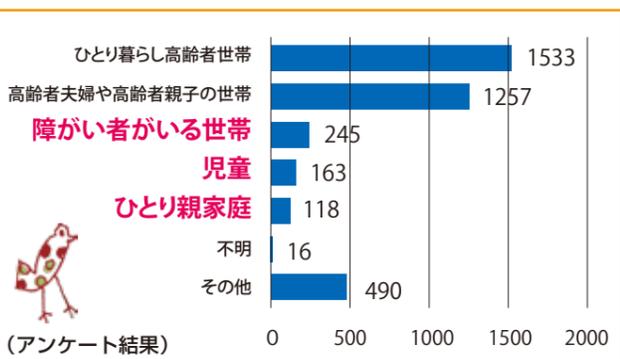
見守り活動というと高齢者を頭に思い浮かべる方も多いと思いますが、福祉委員による見守りは、高齢者に限らず、障がい者がいる世帯、児童、ひとり親家庭へと広がっていることが分かりました。

Q 子どもを見守る方法は

A 福祉委員になったから、民生委員になったからといって特別なことはしていません。子どもが登下校す

Q 心がけていることは

A 登下校時の声かけは、役職にとらわれず、住民の方が中心になっていきます。できる範囲で協力していこうという気持ちで地元にいるからだと思います。子どもが困っている時だけでなく普段から、できる範囲で関わっていくことが大切になると思います。



高齢者を見守っている福祉委員が一番多い
障がい者や児童、ひとり親への見守りも一定数いる



地区社協の活動と取り組みを紹介します

安居地区

食事サービスの工夫



安居地区では高齢者が29%を超え、一人暮らし世帯、高齢者のみの世帯が増加しています。

食事サービスは毎回、高齢者の方の楽しみの一つになっています。

民生委員は、対象者に電話やチラシで連絡して配食しています。お弁当作りはボランティアグループ「えぶろん安居」が担当しています。えぶろん安居の発足には、担い手不足がありました。そこで立ち上がったのが料理好きの地元の有志です。平成15年に発足し、結成14年になり、地区社協の行事でもなくてはならない存在です。



毎回、色どりや味付け、食感などバランスの良いお弁当作りを心掛けている一方、召上がった事がないようなメニューも取り入れていきます。

また、お弁当にかけるお品書きにも工夫が凝らしてあります。それを作っているのが、ボランティアグループ「ココットサークル」です。お品書きには俳句や季節の折り紙が飾られています。

これからは、誰がやっても同じように出来るようにレシピの管理を行って、長く続くボランティアグループにしていきたいです。

(安居地区社会福祉協議会)

事務局 高村 弘江



旭地区

楽しいボランティア教室



今回から市内49地区社協の活動を順番に自己紹介していただきます。トップバッターを飾るのは、安居地区と旭地区です。

旭地区社協では、地域の子どもたちに、相手を思いやり、助け合う心を育ててほしいという願いをこめて、毎年11月頃に旭小学校の4年生を対象に、「楽しいボランティア教室」を開催しています。

この教室では、手話体験や車いす・アイマスク体験、ミニ講演会などを地区社協が中心となって企画しています。毎年、目の不自由な方や耳の不自由な方をゲスト講師としてお招きし、子どもたちが障がいのある方との交流を楽しみながら、自分たち

にどんなお手伝いが出来るか、身をもって学べるような企画を考えています。

子どもたちからは、「目が見えないのに料理を作れると聞いてびっくりした」、「車いすに乗って歩道を移動してみても、少しの段差でも移動が大変だと分かった。困っている人を見かけたら声をかけてあげたい」など、毎年素直な感想が寄せられます。

旭地区は、ボランティア教室だけでなく、敬老会で小学4年生が身体の不自由な方の案内役をしたり、中学生が地区のまつりへの協力や児童館でのボランティア活動を行ったりと、子どもたちが地域で福祉活動や行事に参加する機会が多い地区です。この「楽しいボランティア教室」も、子どもたちが地域や福祉とつながる最初の入口として、20年以上続いています。旭地区社協では、これからも子どもたちに身体の不自由な方や地域との関わりを肌で経験してもらい、思いやりを持って成長してもらえよう、サポートしていきたいと思えます。

(旭地区社会福祉協議会)

事務局 一同

